

令和8年度 青森県総合社会教育センター運営協議会 議事録（要旨）

1 日 時

令和8年7月29日（火） 13時00分～15時00分

2 場 所

青森県総合社会教育センター4階 第2教材開発室

3 議 題

（1） 令和8年度の実施事業について

- ① 全体説明
- ② 育成研修課
- ③ 教育活動支援課

（2） あおもり県民カレッジ運営事業について

4 出席者

〔委 員〕

佐藤委員、秋田委員、菊地委員、木村委員、大西委員、沼田委員
葛西委員、田村委員、金澤委員、加藤委員、工藤（清）委員

〔県総合社会教育センター〕

山下所長、印部副所長、崎野総務課長、木村総務課副課長、
新山育成研修課長、佐藤育成研修課副課長、
川嶋教育活動支援課長、佐々木教育活動支援課副課長

〔学び・生かすあおもりグループ（指定管理者）〕

渡部事務局長

5 議事録

《案件（1）①②について》

【委 員】

センターの方針「人と人とをつなぐ人を育てる」については、昨年所長から示されて、この会議でも話題になったが、非常に良い目標になったと思っている。この方針に向かって皆で一緒に取り組んでいければと思う。

「パワフル AOMORI!創造塾」（以下「パワフル」と表記）について、今年のメンバーは22名もいて、この数年少ない人数が続いていたのでよかったと思う。チラシもとても良くできていて、今年の内容は、このチラシの見た印象から、期待できるものになっていると思う。講師も、この人たちならぜひ参加し

たいと思える方々なので、卒業したメンバーにも来てほしいと思える顔ぶれになっていると思うので、感謝している。

パワフルの卒塾生の活動状況で、活動率は44.7%とあるが、活動していても、連絡が取れなかったメンバーもいる。パワフルに参加しているメンバーは、社会教育の意識が高くなるので、実際に青森県で地域活動を行っていなくても、自分が関わっている場所で、そういう意識を持って活動していて、おそらく8割、9割くらいの方がそういう思いを持っていると思う。

8月29日の交流会ではいろいろなお話しさせていただくが、22名の方々がそのような意識をもつきっかけになればと思う。

【委員】

「チャレンジAOMORI!未来塾」（以下「チャレンジ」と表記）について、これから青森県の将来を担う人財を育てていくという点で大変素晴らしい取り組みだと思っている。新山課長の言葉に「カッコいい大人から学ぶ」という表現があり、実際に第3回講座以降、各会場に来てくださる講師の方々は、本当にかっこいい大人の方々だと思う。例えば「ハピたの」の中沢さんなど、カッコいい大人の方たちが、講師やファシリテーターをしてくださっている。

思いつきであるが、戦略の一つとして、せっかくカッコいい大人たちやパワフルの卒業生の皆さんが集まるので、最初からプログラムに組み込むのは調整が難しいかもしれないが、途中からでも調整がつけば、オプションとして、高校生とパワフルに関係する活動をしている皆さんとの交流会をするのもいいし、合同で親睦を深める場にするのもよいと思う。そうすることで、この高校生たちが将来青森県内で大学生になり、パワフルの場でさらに活躍してくれる可能性があると思う。まさに、人と人をつなぐ活動になるのではないかと思う。これは今ここで展開するという話ではなく、要望として、今後余地があればご検討いただければと考えている。

【委員】

チャレンジについてお聞きしたいが、今年は33名の参加があったということだが、どのあたりの地域から参加しているのか教えてほしい。いい取組であるが、このような講座の情報を、私の住む地区の高校生があまり共有できていないと感じている。

【事務局】

今、手元に詳しい資料がないが、多いのはやはり青森市、八戸市である。多くはないが、五所川原市や町村もある。弘前市はやや少なかったが、弘前市は市で行っている事業が多いことから、高校生の活動が活発である。

県の事業として、市町村の隅々まで参加してもらいたいのので、いろいろな手法で周知していければと思っている。

【委員】

今、事業の説明を聞いていて、各事業の参加者がかなり多いと感じている。

県の方で事業を企画して学校や教育庁へ依頼しても、なかなか参加者が集まらないことがある。

まず参加する高校生や大学生について、個人として申し込んでいるのか、学校としてなのかを教えてほしい。次に参加理由について、すでに学校の授業に組み込まれているから参加しているのか、進学のおすすめをもらうために参加しているのか、個人的に興味があるからなのか、あるいは思いがあって参加しているのか、もし分かっていたらお聞かせ願いたい。

【事務局】

チャレンジについては、最初は集まりが悪かったため、学校の先生を通じてお願いしたこともあったが、最終的には個人で集まる形になった。2 ページ目の「大学生と青森の未来・自分の未来をカタル」（以下「カタル」と表記）は大学生向けの事業である。大学生の場合、各大学の単位認定に組み込まれて参加している例があり、その単位制で来ている人が多くいる。他の大学生はボランティアとして参加している人もいるが、単位制で参加している人の方が若干多い状況である。

参加理由としては、大学生は、単位制の場合は単位認定の実績になるからということで参加している。高校生の場合は、ボランティア活動、社会教育活動というのは、今後の日常生活に生かされるということもあって参加される方も多い。志望動機を聞くと「学びたいから」といった意欲ある方も多い一方で、志望動機が弱い方、やる気の低い方も一定数いる。これをどう増やしていくかが課題だと思う。

【事務局】

我々の事業は名前を少しずつ変えながら続けてきており、長い歴史があって学校にも浸透している部分がある。高校生は先輩から聞いて参加することも多く、その積み重ねで参加している面があると思う。

知事部局の事業は予算の関係もあるが、思いつきで始めてしまう事業がある。学校で実施する場合は、前の年の2月までに事業として組んでおかないとスケジュールが組めないと分かっているが、その段階までに学校にお願いできるかということ、なかなか難しい。そういう事情もありつつ、これは長い期間をかけて理解してもらいながら進める必要があるのだと思う。知事部局のほうで

も、子ども向けの事業が出てきているが、そうしたものは予算化される前から我々と情報を共有しながら進めてほしいと思う。

【委員】

ボランティア活動が単位になるという大学側の事情についても、少し情報をお伝えしたい。私の大学では、2年生が全員必修で履修しなければならない

「地域貢献演習」という科目がある。担当の先生方が全部で10人くらい、自分の授業ではこんなことをしますよと、大体は地域貢献に関係ある活動なので説明を行い、それを2年生全員が聞いて、自分はどのクラスに所属したいか決める。その中にキャリアサポクラスというものがあり、カタルに参加して条件を満たせば、2単位認定するという事になっている。

弘前大学の教育学部を始め、様々な大学で、ボランティア活動などを取り込んで、一定の条件を満たして参加すれば単位を出している。

《案件（１）③について》

【委員】

今AIの時代になってきているが、ここに来ると、人と顔を合わせて話すことは大切だと感じ、自信を持つことができ、こういう場は本当に素晴らしいと感じている。

今、フリースクールが増えており、社会的にも無理に学校へ行かなくてもいいという風潮になってきているのではないかと思う。身近な人から、リスクを取らず、学校へ行きたくない人は無理をしなくていいという声を聞く。考え方が多様になっていて、学校側もそうであるし、親も含めて、考えないといけないことが多くなっている。

家庭教育アドバイザーや親楽プログラムに関しても、考えることが多くなるのではないかと感じている。現状のままでは限界があり、もっと違う方向で、自然体験も大切であるし、顔を合わせて話すことも大切だと思う。

【委員】

11ページの家庭教育アドバイザーフォローアップ研修の講師は決まっているのか。

【事務局】

9月のアドバイザー研修の講師については、今のところまだ検討している方がおらず、これから検討していく予定である。

【委員】

家庭教育に関しては、私が日頃から強く感じていることがある。今は小学校でも家庭教育的なことを教えており、基本的な生活習慣や友達との付き合い方、例えば箸の持ち方や鉛筆の持ち方といったことは、これまで親が教えていた家事教育の領域に含まれていたものであるが、それを小学校の先生が教えている時代になっている。そのため、小学校の先生の負担が非常に大きくなっている。

幼稚園や保育園でも、鉛筆の持ち方から箸の持ち方まで教えているが、なかなか治らない。教えても、家に帰ると適当になってしまい、結局、小学校に行っても中学に行っても、そのままおかしい持ち方になっているという、端的な一つ例をとっていえば、そういうふうなところがある。

昔と今では家庭教育が大きく変わってきていて、保護者の方も、SNSなどで調べて知識が豊富でも、わからないこと、伝わらないことがあると感じる。家庭教育は大事だと思うが、今後どのように進めていけばよいと考えているか教えてほしい。

【委員】

なかなか難しいと思うが、今のご質問に対して何かコメントのある方はいらっしゃいますか。

【委員】

家庭教育はすごく時間がかかる。

以前お話ししたときに、親が子どもに教え、その子どもが育って親になった時にどう子育てするかで結果が出る、という話をした。家庭教育という名前だけで保護者の方が引いてしまう現実があることを踏まえつつ、やはり親が学ぶことが大事であると思う。「教育」という言葉には上から教えるという印象があると思うが、伝えていくという感覚を持ちながら、正しい知識を学ぶことが重要である。

こちらのセンターで掲げている、「人と人をつなぐ人を育てる」ということにも大きな意味があると思う。結果はすぐには出ないが、コツコツやっけていく、その大事さを教えるのではなく伝える形で私たちが伝えていくのがいいのではないかと思う。

私自身は家庭教育サポーターとしても活動しており、家庭教育を企画・運営するときは、何を伝えたいのか、参加者や子どもたちに何を伝えるのかを大事にしながら様々な事業を計画することを意識している。

【委員】

今、家庭教育の話が出ているが、私もいろいろ悩むことが多くて、例えば子どもたちは親の影響を受ける。未成年の場合は特に親の影響から逃れられないことがある。私は小学生を対象にした社会体験事業をしているが、それは子どもに直接いろいろ教えたり伝えたりする場が必要だと思って始めたもので、もう10年くらいになる。自分の家ではやらないことを積極的に試してみる機会を作って子どもに直接関わる場をつくる目的が一つある。

あとは、学校に行かないと決めた子どもの親の悩みも深い。本当に「どうしてうちの子が」と思い、自分たちも追い詰められそうになる。子どもが学校に行かない、みんなと同じようにしないからこそ、自分たちに支援が必要だという声を保護者から聞く。どちらも苦しい。支援を求めたいけれど、支援を受けるためのハードルが高く、自分たちが支援の外側にいると感じたり、支援を受けることに抵抗感があったりする。だから、それらをつなぐような、もう少し受けやすい仕組みが必要だと感じる。そういう機関があればいいと考えている。

例えば、子ども向けの相談で、親が窓口になって入れるところも結構多いので、そういうところに一度相談に行ってみてはどうかと案内している。ただ、学校に行かないと決めている子どもたちがどんどん増えていて、学校の魅力を保つのは難しい。学校は進化しているようで、結局あまり変わっておらず、体制が変わりにくいことが多い。学校に行かないと決めた人たちをどうするか。学校でなくても勉強したい、友達が欲しいというニーズがあるので、そうしたニーズにどう対応するか、早急に体制を作る必要があると思っている。

また、家庭教育というこれまでの仕組み、それを利用したい人たちも多く、窓口はいくつかあってもいいと思っている。多分、そこに行く人たちは共感できる場所を選ぶと思うので、人口は減っていてもニーズはいろいろ増えてくると思う。

いろいろな入り口が必要な時代だと考えながら、悩みつつ活動している。

《案件（２）について》

【委員】

地域と学校とのキャリア教育推進や、家庭教育アドバイザー、家庭教育支援者の養成といった事業について、それを受講した方々が、スキルアップして現場でどれだけの実績を上げるか、どのような活動をしているかといった成果は確認されているのか。

【事務局】

家庭教育アドバイザー派遣については、私どもにご要望をいただくことになっているため、そのような実績も統計として把握しているが、キャリア教育支援について講座を受けた方が実際に新しい活動に踏み出したかどうか、その先を私どもで追跡する仕組みは残念ながらない。現状は皆様に自主的に取り組んでいただく形になっているのが実態である。

【委員】

そこまでは大変かもしれないが、義務でなくとも、任意でそういう方々にメッセージを送ると、新しい事業のヒントにつながることもあるように思う。ご検討の片隅に置いていただければと思う。

【事務局】

参加者同士がネットワークを構築して新しい授業を始めていることについて、いろいろ伺っているので、そうした情報をデータベース的に整理することも今後検討したほうがよいかなと思っている。

【委員】

P T Aも、まさに人と人をつないで活動するというスローガンがあるが、最近では人と人がP T Aの方につながっていない。P T A会員率が学校にもよるが凄く低くなってきていて、特に下北地域で顕著である。ただ、横につながることも非常に重要で、いろいろな取り組みをしているが、なかなか人が集まらない。

先ほどもおっしゃっている方がいらしたが、SNS、LINE でみんながつながっている状況で、新しく入学した一年生の親御さんが、「入る？入らない？」と迷って、結局入らない人がいてなかなか大変になっている。そういう点も含めて、地域と学校キャリア教育は非常に大事であると、みなさんのお話を伺って考えていたところである。

学校関係者やコミュニティ・スクール、P T Aの関係などをどう浸透させていくかを考えているが、それらが存在することすら伝わっていない、周知されていない場合もあるので、センターの事業の中でタイアップできるところはタイアップしていきたいと考えている。そうしないとP T Aの活動自体が停滞してしまう可能性があるので、人員を多めに配置できるよう協力していきたいと思っている。

【委員】

教育活動支援課の事業について、「我が社は学校教育サポーター」事業を行っていただいていることについて、お礼を言いたい。平成12年ごろに非常に苦労して、子どもたちのキャリア教育の受け入れ先を電話で開拓した身としては、センターさんがサポーター事業を始めてから、学校で使いやすくなった。

今は知事部局で実施している夢相伝講座などさまざまな講座があり、学校がキャリアに関する事業を選んで申し込める状態になってきており、非常に良い環境になってきていると感じている。どこかがそういうのをやっているからといって、こちらはやらないというわけではなく、本当に選べる環境を残していただければと思っている。

【委員】

先ほど家庭教育について話し合った件に付随して、8月29日にパワフルで話す機会があるので、それに向けて、社会教育についていろいろと考えていたが、戦後、寺中作雄さんという方が、社会教育の分野の専門家であるが公民館の整備していたのが、社会教育と結びつくところかなと思った。その方の言葉ですごく感動したのが、社会教育でみんなが学んで教養を身につけ、郷土に産業を起こして郷土の政治を立て直し、郷土の生活を豊かにしようという言葉だった。

さきほど家庭教育の効果をどのように出すか、効果の判定についてのお話があったが、そのとおり、必要だと思う。新しく親になって悩んでいる保護者の方が、「社教センターのおかげでこう変わりました」といった形で示せると思う。

この会議に来ると、毎回元気になって帰っている。AI、チャットGPTに相談するとそれなりの回答は返ってくるが、どんどん孤独になっていく面もある。人と会って話すことで元気をもらえる人が、地域や身の回りに何人いるかというのが重要だと感じていて、そういう人を一人でも増やすことや、「そういう人が何人います」というのも、効果判定の一つになるかもしれない。とにかくそういう形で進めていければと思う。

こうやって顔を合わせて話をして、今日元気で帰れるなという毎日が続くと、子どもたちも保護者の人たちも毎日元気に生活できるのかなと思い、取り組んできた。今の時代に必要な何かが、社会教育・家庭教育・学校教育を含めた中にあるように感じたので、このメンバーと一緒に頑張っていければと思っている。